

[研究ノート]

## ワークショップ型プログラムによる アートプロジェクトのプランニングの過程

—「東京ビエンナーレ」における  
「ソーシャルダイブ・スタディーズ」の活動報告から—

## The Planning Process of an Art Project Through Workshop Programs

—Based on the Activity Report of “Social Dive Studies” in “Tokyo Biennale”—

堀場絵吏

HORIBA Eri

〈抄 録〉

本稿は、「東京ビエンナーレ2020/2021」で開講されたアートを実装するスクール「ソーシャルダイブ・スタディーズ」において、アートプロジェクトを企画立案する過程で得た経験や学びをもとに「東京の地場に発する国際芸術祭」のあり方を考察するものである。

キーワード：国際芸術祭、アートプロジェクト、ワークショップ

### Abstract

This paper reports on the studies of “An International Festival Originating in Local Areas of Tokyo”, based on the experience and knowledge through organizing the art project “Social dive studies” which was held in “Tokyo Biennale 2020/2021”.

Keywords: international art festival, art project, workshop

### 1. はじめに

日本で代表される国際芸術祭には、新潟県の越後妻有を舞台に2000年に初回開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」をはじめ、瀬戸内海の島々を舞台に2010年に初回開催された「瀬戸内国際芸術祭」などが挙げられる。国際芸術祭の多くは、過疎化などの問題によって活力を失いつつある地方都市においてアート・ツーリズム<sup>1)</sup>による地域振興の役割が期待されている。筆者も2つの国際芸術祭に鑑賞者として訪れ、芸術作品を巡る過程で、地域の文化や美しい自然景観に触

れる人々が地域住民から声をかけられる様子を見て、その土地に関心を持つ来街者との交流が地域の活力となることを実感した体験がある。このような体験からも、地方都市の国際芸術祭ではさまざまな知見を垣間見ることができるが、東京ではどうであろうか。

そこで筆者は、2021年に初回開催された「東京ビエンナーレ2020/2021」におけるアートを実装するスクール「ソーシャルダイブ・スタディーズ」に受講生として参加し、そのプログラムの中でアートプロジェクトのプランニングを行う過程から、東京の国際芸術祭のあり方を探ることができないかと考えた。

本稿では、第2章で「東京ビエンナーレ」を概説したうえで、第3章で筆者がアートプロジェクトをプランニングする過程を報告し、第4章で東京の国際芸術祭でアートプロジェクトを企画するために必要な視点のまとめと今後の研究展開を述べる。

## 2. 「東京の地場に発する国際芸術祭 東京ビエンナーレ」

### 2-1. 開催概要

「東京ビエンナーレ」は、東京のまちを舞台に2年に1度開催される国際芸術祭である。「アート×コミュニティ×産業」をキーワードに「私たちの文化」を「私たちの場所」で「私たちの手で創る」ことを目指して、美術館ではない公共施設、寺院会堂、歴史的建造物、オフィスビルなどが位置する「東京の地場」で昔から暮らす地域住民の人々と、国内外から集結した幅広いジャンルのアーティストやクリエイターが「新しい都市と文化の祝祭」をともに創りあげていく新しいタイプの芸術祭である。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって2020年から2021年に会期が変更された第1回国際芸術祭は、「東京ビエンナーレ2020/2021（以下東京ビエンナーレ）」と名称が改められ、東京都心北東エリア（千代田区、中央区、文京区、台東区の4区にまたがるエリア）を舞台に2021年7月10日から9月5日の間で開催された。テーマは「見なれぬ景色へ ―純粹×切実×逸脱―」で、総合ディレクターである小池一子氏と中村政人氏によって、東京のまちで仕掛けられていくアートを告知するキャッチ・フレーズ「見なれぬ景色へ」と、芸術の所以を紐解くキーワード「純粹×切実×逸脱」が挙げられている。

遂行された主なプロジェクトは次の3つ+  $\alpha$  である。

- アーティストやクリエイターが企画／推進する「アートプロジェクト」
- 東京のまちで新たな価値を見出すことをミッションとした「公募アートプロジェクト」
- アートを介入させながら継続的にコミュニティと関わる「ソーシャルプロジェクト」

### 2-2. 「ソーシャルダイブ・スタディーズ」

2021年5月29日から9月25日の間で全25回開講された「ソーシャルダイブ・スタディーズ（以下SDS）」は、2020年に都下の大学教員有志によって組織された「学環創出プロジェクト」が礎となっている。

人材育成プログラムとしても機能する「ソーシャルプロジェクト」の一つである「SDS」は、まちのさまざまな場所や地域コミュニティに飛び込んでアートプロジェクトを起こしていくプレーヤーを育成するものであり、プログラムごとにファシリテーターがつくことで、受講生を含めたオープンな対話から東京でアートを実践するための方法論などが探究された。

プログラムは次の5つである。

- (1) レクチャー「アートプロジェクトにダイブする前に知ってほしい7つのこと」

- (2) インターンシップ「東京ビエンナーレ2020/2021運営サポート」
- (3) プレゼンテーション「学環創出フォーラム」
- (4) クロストーク「東京ビエンナーレ参加アーティストトーク vol.1～8」
- (5) ワークショップ「ソーシャルダイブ・ラボ」

### 3. 「ソーシャルダイブ・ラボ」

本章では、プログラム (5)「ソーシャルダイブ・ラボ (以下ラボ)」の活動を報告する。「ラボ」とは、受講生が東京のまちを舞台にアートプロジェクトを1名1企画行う全6回のワークショップ型プログラムである。ファシリテーターは、インディペンデントキュレーターの青木彬氏と「東京ビエンナーレ」でプログラムディレクターをつとめるキュレーターの宮本武典氏が担当した。

#### 3-1. 第1回 オリエンテーション

前半は青木氏の主な企画と、「ラボ」のミッション、スケジュール、アートを社会化するときを考えることについて講義があった。青木氏は企画について「アートであるかどうかではなく“この風景をどうしてもこうしたい”という切実な想像力であることが大切。近年はテクニカルなものがアートであるようにいわれているが、動機が見える化・社会化していることの方が重要である」と話した。

後半は企画内容を詳細に考える前に、青木氏によって立てられた「あなたがダイブするのはどんなところか」という問いに対してグループディスカッションを行った。筆者は東京の都市構造の多様性を挙げ、そのほかの受講生からはジェンダーや国籍の問題などが挙げた。宮本氏からは全体に「共感をつかまえられると企画が前に進む。自己の課題に焦点をあわせ、それらを明らかにしたうえでその背後の社会に迫っていくとプロジェクトの答えが出せる」と指摘があった。第2回までの課題は「自身が実現したい東京をテーマとしたアートプロジェクトの企画案 (150字以内)」が出された。



図1 「ラボ」講義の様子

#### 3-2. 第2回 クロストーク・アイデア発表

出展アーティストの村上タカシ氏と藤原佳恵氏がゲストに迎えられ、前半はアートプロジェクトの実践で大切にしていることについて講義があった。後半はゲストを交えながら企画案についてグループディスカッションを行った。

筆者は、提案する企画を「東京ビエンナーレ」で展開するものと仮定して、プログラム (2)「運営サポート」における会場監視の体験から作成した。地方都市の国際芸術祭はアート・ツーリズムの観点から非日常な体験を目的に来場する鑑賞者が多い一方で、「東京ビエンナーレ」の鑑賞者は目的を持って来場する人だけでなく、通りすぎる過程で来場する人もおり、アートに関心を持たない人でも日常の中に介入した「見なれぬ景色」を観察し、思いがけない発見を得る様子も見られる。少し飛躍するがこうした状況を情緒的に捉えると、目的地に向かう過程で偶然思いがけない発見がある「セレンディピティ」の体験として、幼少期などに「雑木林」で綺麗だと思ふ樹々の葉を集める中で一つひ

とつの葉の形などを観察し、そこに何らかの発見があり、意図せず感性が育まれた経験について誰もが思い当たる記憶があるのではないだろうか。

これらから筆者は、「雑木林」の体験に似た状況としてアートをまちに点在させることを着想し、それらを鑑賞することで次第に感性が育まれるアートプロジェクトを提案したいと考え、企画案を次のように作成した。

#### 【企画案】

「鑑賞のセレンディピティ」をテーマに「雑木林アート」を提案したい。東京では目的地のある鑑賞が多い。しかし、雑木林で見つける小さな驚きの連続が心地よいように、都市を迷い歩きながらたくさん偶然に繰り返し出会うことで、鑑賞者に感性の発酵を起こさせてしまうような気まぐれをつくれたら—

受講生やゲストからは「東京のまちにはセレンディピティがあふれており、それをキーワードとしている点がよい」「恒常的、または、限定的に設置されるのか」「どのようなアートを鑑賞してもらうのか」といった意見があった。これらから企画案の方向性はそのまま進め、さらに内容を検討することにした。青木氏からは全体に「企画を自己完結させるのではなく、アーティストなどに協力をオファーして内容を発展させることもできる」と指摘があった。補講2までの課題は「アートプロジェクトのタイトル、ステイトメント、実現に向けた要素（5W1H）、イメージ画像やイメージイラストをまとめた企画書」である。

#### 3-3. 補講1 企画案のブラッシュアップ

筆者は宮本氏から「どのような場所でどのようなアートを点在させるか」について『『東京Z学<sup>2)</sup>』（中村政人）や『文キョウの境カイ<sup>3)</sup>』（スタジオバッテリー）のように、まちそのものに直接手を加えることなくアート体験を提供することもできる」と指導があった。

#### 3-4. 補講2 企画書の講評

青木氏が企画書全体を「身近なことをテーマとして些細なものをアートと呼ぶ人が多い」と振り返った後、個別に講評があった。筆者は、これまでの意見や指導に自身の経験を照らしあわせながら企画書の検討を行った。

まず、場所について、会場である東京都心北東エリアの中から、以前従事していたハウスメーカーで住宅の企画開発をしたことがある台東区や墨田区などの下町を取り上げた。次に、アートについて、下町は住宅の家先をまちの一部として豊かに使用する特徴を持つと感じた体験から、自分に関係のあるわがごとなもの・ことの生活文化にタイトルをつけることで日常の風景に意味を与え、鑑賞することを着想した。この試みは、住民が気づいていないまちの魅力を発見することだけでなく、地域コミュニティが縮小化しつつある現代で住宅がまちの一部であること再認識することにもつながると考えた。

また、企画案では「セレンディピティ」の体験から「雑木林アート」の着想を述べたが、多様な都市の背景を持つ下町が種々様々な樹々が生い茂る「雑木林」に見立てられると考え、企画案の一部を修正して企画書のタイトルとステイトメントを次のように作成した。

#### 【タイトル】

したまち・いえまえ美術館



## 【ステイトメント】

歴史・文化が複雑に形作られた下町＝雑木林シティに、「セレンディピティ的鑑賞」ができるアートを実装する。雑木林シティでは、たくさんの「わがごとなアート（家先に「展示」されているオブジェ、窓際で通路に向けて飾られているぬいぐるみ、色とりどりのガーデニング、ひらかれた玄関土間）」が無意識に展開されている。明日には変わっているかもしれない、気まぐれな「いえまえ美術館」たち。まちに点在するサイトスペシフィックな「いえまえ美術館」に繰り返し出会うことで、まちと人が大切な関係でつながっていることを再認識する。

ファシリテーターからは次の指摘があった。

- 些細なものをアートと名付けたときに、関心がない人に届けることが難しくなるため、そのことを解決できるとよい
- 家の前に展示していることが「美術館」といえるか、「美術館」の観念を再確認することが必要である
- 実現したときに地域の人からどのような反応がもらえるか参加者のことを想像すると、よい取り組みとなる

また、補講2の後に宮本氏によるブラッシュアップと、プログラム（1）レクチャー内で小池一子氏からフィードバックを受ける機会があり、次の助言があった。

- 『ナショナル・ガーデン・スキーム<sup>4)</sup>』のように、家のもの・ことを一齊に見せてもらえるような取り組みになると、発展性のある企画になるのではないか。プロジェクトとしてまとめることにとらわれず、今後継続して行われるイベントのようにブラッシュアップしていくとよい。（宮本氏）
- 京都の祇園祭のように、所有する屏風などを家の戸を開けて見せることは、日本でも昔おおらかにしていた。最も参考となるのは、ヤン・フートによって企画された『シャンプル・ダミ展<sup>5)</sup>』である。それぞれの家の好きな場所に自分が思うアート作品を置いてもらい、まちの人がお互いに見ていく。これは伝説的な展覧会イベントであった。（小池氏）

### 3-5. 補講3 企画書のブラッシュアップ

補講3までの指摘や助言から、筆者は宮本氏と最後のブラッシュアップを行い、家先だけでなく、下町の家の戸を開けて見せる試みとして、まちと関わるような土間などのスペースを取り入れるなどして私的空間の一部を開放する「すみびらき」を行う住宅に注目した。

そのほか、最終企画書までに次の内容を検討した。

- プロジェクトのイメージを明晰に想起させるタイトルとする
- プロジェクトによって人と人をつなぎ、生活表現の機会を提供することが具体的に伝わるステイトメントにする
- 限定的なイベントとして鑑賞者に公開し、参加できる体験のあり方を提示する
- 「すみびらき」を行う住宅と鑑賞をつなぐ媒体として、象徴的なオブジェクトを家先に出現させる

### 3-6. 最終回 企画発表会

各人の発表と講評が進められた後、総評があった。コメンテーターは青木氏と宮本氏をはじめ、プ

プログラム(3)「学環創出フォーラム」のメイントーカーである伊藤達矢氏と中島伸氏、事務局の宍戸遊美氏がつとめた。

筆者が提案するのは、「東京ビエンナーレ」が目指す「私たちの文化」を「私たちの場所」で「私たちの手で創る」ことから、「住宅をまちの一部として捉える文化」を「下町」で「まちとのつながりを大切にしている人々と創る」ことである。ここでは、下町に点在する「すみびらき」を行う住宅をリレー形式で限定公開していくほか、イベントを知らせるオブジェクトを軒先に飾ることで新しい「地域の風景」を創ることを想定している。さらに、地域住民と来街者の交流を祝う「地域の祝祭」として、まちと人のつながりを感じられる一過性ではない取り組みを目指したいと考える。

最終企画書のタイトルとステイトメントは次のとおりである。

#### 【タイトル】

つながる・したまちのいえごと

#### 【ステイトメント】

「下町の家で行われていること」を「家ごと」ひらく、雑木林的すみびらきを計画する。下町では、思い思いのあり方で生活を楽しむ「いえのこと（いえごと）」がひらかれている。お祭りのときの「いえごと」もあれば、日常の中での「いえごと」もある。普段はつながることがない「いえごと」を、東京ビエンナーレの期間中にリレー形式で一斉に限定公開していく。参加している家には、軒先に小さなのれんなどが飾られる。それらを目印にすみびらきの家を訪れると、その家の「いえごと」が体験できるほか、お茶などのもてなしを受けることができる。すみびらきは、世代や分野を超えてそこに住む人々がおおらかにつなげるものである。まちに点在する一つひとつの小さな「いえごと」を巡ることで、まちとそこに住まう人が大切な関係でつながっていることを再認識することができる。

コメンテーターからは次の講評があった。

- ・「セレンディピティ」にいたる動線の設計はアートの現場に関わる人の共通課題でもあるため、モデルケースとして展開されるとよい。(青木氏)
- ・すみびらきを行う前の地域へのアプローチ（ヒアリングやリサーチなど）のデザインを工夫するとよい。最終アウトプットにおいて強く表出する部分ではないが、そのストーリーが美しいと面白いアートプロジェクトになる。(伊藤氏)
- ・下町エリアでは古い家屋の取り壊しが相次いでおり、維持継承が課題となっている。それらを顕在化し、まちの風景を維持していくことにも寄与できるとよい。(宍戸氏)

最後に、青木氏が総評として「成功事例を見るとそのフレームを追いかけてしまうが、自身がダイブしたいところをしっかりと捉え、まちに飛び込むときは自分の言葉で説明できることを大切にしたい」と締め括った。



図2 「ラボ」企画発表会の様子

## 4. 成果と課題

本稿は、第1回「東京ビエンナーレ」で開講された「SDS」に受講生として参加することで、アートプロジェクトのプランニングを行う過程から、東京の国際芸術祭のあり方の一つを考察するものであった。

筆者のアートプロジェクトは「東京ビエンナーレ」で展開するものと仮定して、プログラム(2)「運営サポート」における会場監視の体験から、そこにいくと思いがけない発見がある「セレンディピティ」の体験として「雑木林アート」を着想したことが起点となっている。そして、歴史的にも文化的にも複雑な都市環境が「雑木林」に見立てられると考えを発展させ、自身の経験から下町を会場に設定して住宅の家先や「すみびらき」に注目したイベントを行うことで生まれる「地域の新しい風景と祝祭」を提案した。一連の提案を大きく方向転換することなく、常にブラッシュアップする形でプランニングをまとめられたのは、「ラボ」における2つの指導がポイントとなった。「ラボ」の指導では、アートプロジェクトを企画するうえで「自身の視点でダイブしたい場所や状況が提示できているか」という視点と「作品と鑑賞者をどのようにつなぐか」という方法論を問いつけることに集約される。筆者の過程からも、これらを意識することで約4ヶ月という期間でもベースとなる企画を立案できることを示唆する結果となった。しかしながら、今回は企画を立案するところまでが課題であるため、これから実際に展開していくためには各自が計画を立てて進めていかなければならない。

今後の研究展開については、東京の国際芸術祭のあり方の一つとして雑木林的にすみびらきをすることが地域理解・地域貢献につながるかどうかを検証するために、自身のアートプロジェクトを第2回以降の「東京ビエンナーレ」で実践することを考えている。この取り組みが採択されるためには、まず、今回十分に調査できていない先行事例の特徴を明らかにし、「雑木林アート」や「セレンディピティ的鑑賞」といったキーワードを丁寧に解説することが課題である。これによって、先行事例と比較して筆者の企画の独自性を確認したうえで、次のステップとして下町ですみびらきを行う住宅のリサーチを進め、地域に深く入り込み継続的に関わっていく「ソーシャルダイブ」に取り組んでいきたい。

末筆ながら、本稿が東京の国際芸術祭においてアートプロジェクトを企画するプレーヤーの一助となれば幸いである。

### 謝辞

青木氏や宮本氏をはじめレクチャーをしていただいた講師の皆様、東京ビエンナーレ事務局および3331アーツ千代田の関係者に深甚の謝意を表します。さらに、企画立案の過程で貴重なご意見をいただいた受講生の皆様に感謝申し上げます。

### 注

- 1) 芸術作品を巡ることで地域の文化に触れる活動でアート観光ともいわれる。
- 2) 路上観察学や考現学の先にあるZ学を研究するソーシャルプロジェクト。
- 3) まちの境界に着目し、境界を操作することで街の環境形成の再構築を試みるソーシャルダイブプロジェクト。
- 4) イギリスのプライベートガーデンを有償で一般公開し、その収益を慈善団体に寄付する取り組み。
- 5) ベルギーのアントワープ市内の51の住宅を会場として1986年に開催された国際的な大規模展覧会。

## 参考文献

東京ビエンナーレ2020/2021 公式ホームページ <https://tb2020.jp/> (2021年12月26日アクセス)

東京ビエンナーレ2020/2021 公式タブロイドマップ (2021年7月12日現在)

## 図版出典

図1・2 東京ビエンナーレ事務局スタッフ撮影